

2022 年 12 月 5 日

専門委員会開催報告

会合名	第 5 回「原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題」研究専門委員会
会議種別	本会議 幹事会 メール審議 その他*() *分科会、WG 等具体的に記入のこと
開催日時	2022 年 11 月 30 日(水)10:00～12:30
開催場所	Zoom によるオンライン開催
参加人数	13 名 小山教授(外部講師)、佐田幹事、寿楽幹事、稲村委員、木藤委員、桑垣委員、小林委員、高木委員、竹田委員、布目委員、廣瀬委員、諸葛委員、龍原オブザーバー
議事	1. 主査挨拶 土田主査が急きょ、欠席のやむなしとなったため、割愛した。 2. オブザーバー紹介 オブザーバー制度の運用開始に伴い、新たにオブザーバーとして参加される方々をご紹介した。 3. 小山良太先生(福島大学食農学類教授)ご講演 福島大学食農学類教授の小山良太先生からご講演があった。福島原発事故が福島県内の第一次産業に与えた影響、小売流通との関係、消費者の意識、対策・支援のあり方、処理水放出の政策形成・決定の課題などが解説された。 4. 小山先生を交えた質疑応答(オブザーバー含む) 小山先生のご講演を踏まえ、質疑応答がなされた。ステークホルダー間の認識のギャップの問題などが議論された。 5. 小山先生を交えた質疑応答(委員のみ) 引き続き委員のみによる質疑応答がなされた。問題を「風評」問題と捉えることが及ぼす影響、政策形成・決定のしくみの課題などが議論された。 6. 幹事会報告(委員のみ) 2023 年度予算について、メール審議にて審議した予算案について幹事会から補足説明を行い、内容を改めて確認した。 7. 2023 年春の年会における企画セッションについて(委員のみ) ディスカッサント(指定討論者)の候補について意見交換を行い、委員会幹事ならびに共催者である社会・環境部会の役員、加えて候補者とのコネクションのある委員を中心に準備を進めることとした。
備考	

2022 年 11 月 22 日

専門委員会開催報告

会合名	第 4 回「原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題」研究専門委員会
会議種別	<u>本会議</u> 幹事会 メール審議 その他*() *分科会、WG 等具体的に記入のこと
開催日時	2022 年 11 月 4 日(金)11:30～12:30
開催場所	Zoom によるオンライン開催
参加人数	12 名 土田主査、佐田幹事、寿楽幹事、木藤委員、桑垣委員、小林委員、高木委員、竹田委員、布目委員、廣瀬委員、諸葛委員、山本委員
議事	1. 主査挨拶 土田主査より挨拶があった。 2. 第 4 回幹事会報告 議事録の内容を紹介し、異議なく了承された。 3. 2023 年春の年会における企画セッション提案について 社会・環境部会運営小委員会と本委員会との共催セッション提案が承認されたことを受け、当委員会としても共催を前提に提案内容の検討を行った。寿楽幹事より示された原案を大筋でとした。 コメントを求める有識者については「風評」問題についての学術業績のある外部有識者を念頭に人選を進めることとした。 4. オブザーバー制度の運用について 幹事会よりオブザーバー制度に関するこれまでの経緯と具体的な運用の提案が報告された。幹事会案を踏まえた議論の結果、チャタムハウス・ルールの考え方をベースとし、委員会審議の透明性や対外的な説明責任と、自由闊達な議論の場の確保を両立させることとした。 これを踏まえ、佐田幹事からオブザーバーとしての参加を希望する方に説明と確認を行い、同意を得た上で次回以降の委員会にオブザーバー参加いただく方向で運用することとした。 5. 次回委員会会合と外部講師の招へいについて 幹事会からの提案どおり、小山良太氏(福島大学食農学類教授)を招へいしてご講演をお願いすることとした。
備考	

2022 年 8 月 22 日

専門委員会開催報告

会合名	第 3 回「原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題」研究専門委員会
会議種別	<u>本会議</u> 幹事会 メール審議 その他*() *分科会、WG 等具体的に記入のこと
開催日時	2022 年 7 月 22 日(月)14:00～16:00
開催場所	Zoom によるオンライン開催
参加人数	12 名 土田主査、佐田幹事、寿楽幹事、稲村委員、木藤委員、桑垣委員、小林委員、高木委員、竹田委員、布目委員、諸葛委員、山本委員
議事	1. 主査挨拶 土田主査より挨拶があった。 2. 第 3 回幹事会報告 議事録の内容を紹介し、異議なく了承された。 3. 委員の交代について 伊藤友宣氏(電気事業連合会)から廣瀬大輔氏(同)への委員交代につき、企画委員会にて承認されたことが報告された。 4. 関谷直也『風評被害:そのメカニズムを考える』の講読 山本委員より資料 3-2 に基づいて同書の要旨ならびに山本委員自身の疑問や意見についての報告があった。これに対し、以下のような意見交換がなされた。 ・ 風評被害の問題の背後にはしばしばジャーナリズムによる不正確な報道があり、その中には「誤報」と明確に位置づけるべきものもあるように思われる。 ・ 風評被害の本質は人びとの主観的な安全観に関わるが、他方で風評被害の発生は社会的現実でもある。必ずしも危険を示唆しない科学的事実の存在そのものだけでは乗りこえられない。測定やその結果の公開を積極的に行う、事実に関する情報を公的機関が積極的に発信するなど、少しでも対策につながる取り組みを考え、行動することが重要だと受け止めた。 ・ ジャーナリズムが及ぼす効果については確かに負の面もあるが、それはより広く「リスクの社会的増幅」(social amplification of risk)現象の一例として解し、道徳的な非難に偏らないのが社会科学的には主流ではないか。 ・ 本書の刊行時に比べても、今日では SNS の影響力が大きくなっているように思われ、SNS 時代においてこの問題の発生や対処方法にどのような変化が生じているのかを検討する必要がある。 ・ 本書の議論は、ドイツの社会学者 U.ベックが示した「リスク社会」の考え方ともよく符合する。人びとがよりリスクに敏感になり、許容度が低くなったように見えるのは社会の変化としてやむを得ず生じるものであり、啓発や教育などで容易

	に解消すると見るべきではなかろう。 - 放射線はそのリスクの確率性や晩発性に加えて、容易に、かつ正確に検出できるリスク源である点でも化学物質などとしばしば対比されることはあらためて確認しておいた方がよいのではないか。 - BSE 事例や福島原発事故後の福島県産米などのように、全数検査やトレーサビリティ制度など、コストが負担可能な範囲であれば積極的に消費者の不安に応える取り組みをすることがかえって総合的な社会的コストを下げるという意見もある。他方でそうした取り組みはリスク管理のあり方としては過大に過ぎ、適切ではないとの反論もある。こうした点も今後議論すると良いのではないか。 - 本書の結論部分では、原子力は風評被害を生じやすい性質を持っていること、したがって原子力利用の社会的コストは、風評被害を生じさせない前提で考えるべきではなく、風評被害の問題があるとしてもコストが見合うのか、という風に考えるべきだという意見が示されている。原子力関係者はこの点は正面から受け止めるべきではないか。
備考	

専門委員会開催報告

会合名	第 2 回「原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題」研究専門委員会
会議種別	本会議 幹事会 メール審議 その他*() *分科会、WG 等具体的に記入のこと
開催日時	2022 年 6 月 27 日(月)14:30～17:00
開催場所	Zoom によるオンライン開催
参加人数	12 名 土田主査、佐田幹事、寿楽幹事、稲村委員、木藤委員、桑垣委員、小林委員、高木委員、竹田委員、布目委員、諸葛委員、山本委員
議事	1. 主査挨拶 土田主査より挨拶があった。 2. 第 2 回幹事会報告 議事録の内容を紹介し、異議なく了承された。 3. 常時参加者(オブザーバー)について 資料 2-2 として前回委員会後の議論を踏まえて修正した原案が幹事会から提案された。種々意見交換の結果、原案を承認するとともに、留意事項を申し合わせた。 4. 2022 春の年会における社会・環境部会企画セッション「『風評』と『風評被害』を再考する」からの報告・振り返り 佐田幹事、土田主査、竹田委員から当該セッションでの報告の概説があった。それぞれについて、種々意見交換がなされた。 ・ 1F 事故後の早い時期に政府や事業者が被害者、地域社会や社会全体に対して行った、極めて野心的な目標設定(約束)が経路依存的に全体最適を損ねてきたのではないかと。 ・ クライシスマネジメントから平時のリスクマネジメントへの移行に失敗している。 ・ 社会全体が戦略的思考、適応的な管理に不慣れである。 ・ 長期の停滞の中で事業者の組織内部、現場においてモラルの低下が見られる。 ・ それらの全てが必ずしも必須でないコストを積み上げ、被害の回復や復興の遅れ、社会・市民の負担増大につながっている。 ・ 風評被害の背景にある、流言に関する社会心理学的なメカニズムについて、集合行動論、予言の自己成就など社会学、社会心理学の基礎的な概念が参考になる。 ・ トリチウムのリスクをめぐる専門家と一般市民、ステークホルダーの間の認知のギャップ、出所・属性によるスティグマの違いなどが主な論点となり得る。

	・ 風評「被害」の原因者を特定しようとするのではなく、高度複雑リスクの時代においては現実にはしばしば起きる問題と捉え、社会としての救済・支援を求める方向性が有効ではないか。 ・ 全体の議論を通して、流通や生産の現場に携わられる当事者や、そうした分野に学識の深い研究者からの話題提供、そうした方々との対話の場を持つことの必要性が認識された。 5. 関谷直也『風評被害：そのメカニズムを考える』の講読 議題 4 に多くの時間を割くこととなり、改めてこのテーマの重要性が認識されたため、本議題は次回委員会で改めて扱うこととし、今回は各委員が本書を読んで感じた疑問、議論したいポイント等の共有に留めた。次回、改めて山本委員に当該書籍についての報告をお願いすることとした。 ・ 本書の議論の中で自然科学系の科学者が登場しないのが気になった。彼らの役割が適切に果たされていないのが問題に関わっているのではないか。 ・ やはり具体的な解決策の提案に議論がつながるとよい。言葉の言い換え、説明の仕方、等。 ・ 事業者等が説明の一貫性を重視するために、経路依存的に説明ややり方を変えられない点は風評被害のメカニズムを考える上でやはり重要ではないか。 ・ 併読あるいは次に講読すべき書籍として、以下が推挙された。 林智裕『「正しさ」の商人：情報災害を広める風評加害者は誰か』（徳間書店、2022）、関谷直也『災害情報：東日本大震災からの教訓』（東京大学出版会、2021）
備考	

2022 年 4 月 27 日

専門委員会開催報告

会合名	第 1 回「原子力に関わる人文・社会科学的総合知問題」研究専門委員会
会議種別	本会議 幹事会 メール審議 その他*() *分科会、WG 等具体的に記入のこと
開催日時	2022 年 4 月 18 日(月)14:00～17:00
開催場所	Zoom によるオンライン開催
参加人数	12 名 土田主査、佐田幹事、寿楽幹事、稲村委員、木藤委員、桑垣委員、小林委員、高木委員、竹田委員、布目委員、諸葛委員、山本委員
議事	1. 主査挨拶 土田主査より、設立申請の趣旨に鑑みつつ、広く自由な審議を行っていきたい旨、挨拶があった。 2. 委員紹介 委員各位より自己紹介をいただいた。 3. 第 1 回幹事会報告 議事録の内容を紹介し、異議なく了承された。 4. 常時参加者(オブザーバー)について 資料 1-4 として幹事会より原案が示され、種々意見交換がなされた。その結果、継続審議を要することが確認され、幹事会で検討の上、委員会に改めて方針を諮ることとなった。 5. 当面の検討事項について 資料 1-5 として委員会設立申請書に鑑みた原案が幹事会より示され、原案通り了承された。 6. 「1F 処理水」問題に関する各委員の所感・情報の共有 以下のような論点について意見交換がなされた。 ・日本固有の「風評」概念の逆機能(問題の解決にむしろ資さない、妨げている可能性) ・政策的手当の困難性、対立構図をつくらざるを得ない含意 ・識者からのインプット ・現場からのインプット ・他分野から学ぶ(BSE 等) ・農水行政の問題 ・リスコミ研究や科学技術社会論などからのこの間の主張への省察(住民参加、対

	話、等々の提案とその行政や事業者の受容、変容、それに対する学術側の省察) ・当委員会ならではの視座とは何か ・不信のメカニズム ・政治的リーダーシップ、政治の役割 ・スティグマ論: 社会的なアイデンティティを脅かされる、差別、偏見などの不正義、不公正の問題 7. 成果の公表方法について 資料 1-6 として幹事会からの提案が示され、方向性について了承された。 8. その他 ・委員会の議事メモ作成者は輪番制とする。 ・委員会名称がやや長いため、今後、内部での略称としては「総合知」研究専門委員会と称することを申し合わせた。 ・次回以降の委員会に講師として招く有識者へのご来演依頼を検討することとし、幹事において年間の審議予定の立案も含めて調整することとした。 ・秋の大会での企画セッションの開催要否や内容について、関連部会である社会・環境部会との共催なども踏まえて検討することとした。
備考	